大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

ぷらっとシネマ　新しい苦しみ、新しい世界『２番目の妻』（Ｕ・ダー監督）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-06-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 萩原, 弘子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/15434

ぷらっとシネマ

萩原弘子

新しい苦しみ、新しい世界
『２番目の妻』（U・ダー監督）

村を挙げての賑やかな婚礼の宴が終わると、19歳の花嫁アイシャは花婿ハッサンとともにウィーンに旅立った。ハッサンはオーストリア在住のクルド人だ。ヨーロッパでの暮らしは、トルコの田舎よりもアイシャの幸福を約束してくれるだろう。そう考えて、両親はアイシャの結婚を決めた。しかし実は、アイシャの知らない秘密の約束があった。ウィーンに着いたアイシャは、自分の夫がハッサンではなく、彼の父ムスタファであると知る。ハッサンの母で癌闘病中のファティマが、自分の亡きあとを考えて、夫のために故国から嫁取りをしたのだ。２番目の妻アイシャとファティマの娘たちとの関係はぎくしゃくしていたが、ファティマはアイシャを可愛がる。１年ほどしてアイシャに息子が生まれる頃には、妻２人は信頼と慈愛の絆で結ばれているように思われた。

ところが予想に反して、闘病中のファティマではなく、夫ムスタファがあっけなく死んでしまう。ファティマはアイシャを家族につなぎとめる努力をする。若いアイシャは、偽装婚の夫役であったハッサンに恋心を抱くようになり、告白に及ぶが、返ってきたのは意外な答えだった。アイシャの恋は成就しない。秘密の約束で決めた結婚の裏には、家族も知らない別の秘密があった。息苦しい家から外に出ようと、スーパーで働きだしたアイシャは、職場で新しい秘密の恋に出逢う。無理な秘密がいくつも重ねられた果てには、崩壊が待つ。

国際Ｄシネマ映画祭（川口市）でグランプリを受賞した作品だ。Ｄシネマとは、フィルムを使わないデジタル撮影による映画を指す。しかしあれこれのウェブサイトに掲出の本作紹介文を見ると、まともなものがなく、私は国際映画祭の責任について考えてしまった。誰よりもまず国際映画祭で賞を出す側が不勉強で、作品の新しさと意義をしっかり紹介して、文化的な距離に起因する初歩的な誤解はあらかじめ防いでおくという責任を果たしていない。

多くの紹介者が、本作に一夫多妻制に対する監督の批判を読みとっている。たしかに、オーストリア生まれのクルド人である監督ダーは、第２夫人の習慣に批判的だ。男性のための家父長主義的習慣だが、本作では第１夫人のファティマを積極的な推進役にすることで悲劇性を強調したと語っている。しかし本作を、「トルコ人の風習に疑問を投げかけ」ている（映画. com）とか、「伝統的な価値観に支配された家族の崩壊と再生」（シネマトピックス・オンライン）を描いたと紹介するのは、的外れだ。ましてや、映画祭ウェブサイトにあるように、「トルコを始めとする中近東に残る風習」を描いたという説明は誤っている。本作の焦点はトルコや中近東の過去ではなく、オーストリアの現在にあり、移民は過去からでなく、同じ現代のトルコからやって来ている。

20世紀初頭に近代的世俗国家を設立したトルコは、国民国家として、クルド人もトルコ人だと主張して、現実にはマイノリティとして苦境を強いられるクルド人の存在を認めてこなかった。ヨーロッパにはイラク、イランからのクルド人移民もいるが、彼らが国外に新天地を求める理由はそれぞれの状況に応じてかなり違う。「中近東」「トルコ」「クルド」――どんな一括もできない。

またたしかに、第２夫人を娶る習慣は古くからあるにしても、一家がアイシャを迎えたのは、彼らがオーストリアで移民であることと深く関係している。ここで移民として生きていくには、なんとしても家族の結束を堅固にしておきたい。単に古い習慣に縛られているからではなく、ヨーロッパでの移民としての暮らしが、ファティマに古い習慣の利用を選択させた。悲劇の選択だ。彼らを旧套墨守のおくれた人々と見るなら、悲劇は自業自得というだけのことになる。しかし、詳細は書けないが、本作の悲劇には「その後」がある。

いまの時代に国際映画祭を催すなら、それも重装備と大規模予算を必要とするフィルムとは違う、デジタル映画に希望を見ようという映画祭を催すならば、そうした新技術を待望していた世界的大テーマのひとつが「移民」であることを知っておいてほしい。グローバル資本主義の矛盾が生みだした移民の波は、世界各地で新しい苦しみを強いられている。しかし、その苦しみの経験に立つ作品をつくる者が、ダーのように、当の移民のなかから登場してもいる。そうやって世界は新しくなっていく。本作の最後の最後に置かれた悲劇の「その後」が、新しい世界を予感させてくれる。これは古い習慣についての映画ではない。

（オーストリア、2012年、93分）